

---

# 非通知

清音純

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

非通知

### 【Zコード】

Z9774B

### 【作者名】

清音純

### 【あらすじ】

歌が上手な少女、美里は幼馴染の純の勧めでオーディションに参加する事になる。緊張する美里に純がかけた言葉とは……。

(前書き)

この物語はファイクションです

小さい頃から、私は歌を歌うのが好きだった。運動も勉強もそれほど出来る方じゃないけど、歌を歌うことだけは誰にも負けない。そういう自信があった。

私が歌を好きになったのは、幼馴染の男の子の影響だった。名前は純。私より一つ年下で、子供の頃から身体が弱くて病気がちだった。小学校までは毎日一緒に通っていたのだが、中学校に入つてからは何度も入退院を繰り返し、結局中学校を中退した。

病気のせいで気弱になる彼を励ますために、私はよく歌を歌う。そんな時、彼はとても嬉しそうにそれを聴いてくれた。

『美里ちゃんの歌は世界一だよ！』

それが、彼の口癖。お世辞だとわかっていても、私はそれが嬉しかった。

私は高校生になつて合唱部に入った。顧問の先生は私の歌をとても高く評価し、熱心に指導してくれた。

そんなある日、顧問の先生が私に言った。

『美里、オーディション受けてみない？』

私はその突然の申し出に驚いた。聞けば百人近くが応募するオーディションで、地方のケーブルテレビで生中継するという。正直、私は初め乗り気じゃなかった。受かるわけがないと思つたし、大勢の前で一人で歌うのは恥ずかしい。でも、その日病院で純にこの話をしたら、彼は何故か自分の事のように喜んだ。

『出なよ！ 美里ちゃんなら絶対受かるから！ 僕もテレビで見たいし！』

純のこの言葉にも後押しされ、私は結局オーディションに参加する事にした。

オーディション当日、控え室の中で私の緊張はピークに達していた。周りにいる人達は、いかにもオーディション慣れしているといわんばかりにリラックスしている。気を紛らわせようと発声練習をしてみるが、声がからからでほとんど音が出なかつた。

こんなので受かるわけない。私は舞台で声が出すに笑われる自分の姿を想像し、思わず涙が出そうになつた。

そんな時だつた。携帯電話からバイブレーターの音が聞こえる。私は携帯電話を手にとつて、ぱかつと開いた。ディスプレイには「非通知」の文字。誰だろう、と思いながら、私は通話ボタンを押して、携帯電話を耳に当てた。

「美里ちゃん？ 純だけど」

携帯電話からは、聞きなれた声が聞こえてきた。

「病院から電話してるんだ。今平氣？」

「うん……」

今すぐここから逃げ出したい衝動を抑えて、私はなんとか声を絞り出した。純には弱氣な姿を見せたくない。いつだつて、元気にしてあげられるように、強い私でいなきやいけない。そんな思いで、私は声が震えないように必死で努力した。

「もしかして、緊張してる？」

純が無邪気な声で私に尋ねる。人の気も知らないで、何楽しそうな声出してるのよ、と内心で文句をつけながらも、私は答えた。

「そりゃ、少しあするよ」

「そなんだ。でも、大丈夫。僕も今テレビで見てるけど、美里ちゃんよりうまい人なんて一人もいないよ！ 絶対受かるから！ 頑張つて！」

純が元気な声で言う。純のこんな元気な声、初めて聞いたような気がした。心の中に温かいものが広がっていく。私の歌を誰よりも知っている彼の言葉に、偽りがあるはずがない。いつものように歌えばいいんだ。そうしたら、純も喜んでくれる。

「任せといて！ 絶対受かるから！」

「うん… 頑張って…」

そう言つて、私は電話を切つた。いつの間にか、次が私の番になつていた。軽く发声練習をしてみる。いつもと同じ私の声が、苦もなく部屋の中に響き渡つた。

「結果を発表します」

壇上の中年の男性がマイクに向かつて言つ。純のおかげで、全てを出し切ることが出来た。結果がどうであれ、後悔はない。

「合格者は、エントリーナンバー67、片岡美里さんです！」

拍手が湧き起つた。やつた、と私は思わず心の中でガツッポーズを決めた。

「おめでとう、美里」

お母さんが私のところへやつて来る。隣には純のお母さんもいる。私はすぐにお母さんに尋ねた。

「お母さん、病院の番号教えて… 合格したの、純のおかげだから。お礼を言わないと」

その言葉に、お母さんは何故か隣にいる純のお母さんと顔を見合させた。

「お母さん…？」

不思議に思つて、お母さんを見る。お母さんは私の両肩に手を置くと、ゆっくりと言葉をつむいだ。

「落ち着いて聞いてね、美里。純君ね、今朝、亡くなつたの」

「…………え？」

一瞬、何を言つているのかわからなかつた。だつて、そんなはずがない。あの電話がかかってきたのは直過ぎだつた。その時、私は確かに純の声を聞いたのだ。

「嘘だよ… 私、眞間に純と電話で話したもん…」

抗議する私を、お母さんは困つたような哀れむような複雑な顔で見つめた。

「美里ちゃん……」「めんなさいね……。あの子、美里ちゃんの歌が

聴きたい、歌が聴きたいって、何度も何度もそう言つて……」

純のお母さんが涙を流して、顔を両手で隠しながら言つ。とても冗談なんかには見えない。それでも、私は必死に言葉を絞り出した。「だって……テレビで見てるって言つてた！ 私の歌、誰にも負けないって！ 私の歌も聴いてたはずだよ！ テレビで見てたはずだよ！」

「そうだね……」

お母さんが涙声で答える。でも、これ以上、現実から逃げる事は出来なかつた。目の奥が熱くなつて、胸が痛くて、苦しくて、喉がからからで、純の大好きだつた声は、今は出せそうにない。

オーディションに合格した私が流したのは、嬉し涙ではなく、悲しみの涙だつた。

あの日から、舞台に上がる時には、私は必ずこの携帯電話を持つていいく。もう古くて誰も使わない携帯電話だけど、私にとっては何よりの宝物。

その着信履歴には、『非通知』の三文字が、今でも大切に残つている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9774b/>

---

非通知

2010年10月8日15時30分発行